

めざましトーク

地域の教育力を高める新しい風

平成 28 年 12 月 4 日（日）

9 : 00 ~ 10 : 30

国立大洲青少年交流の家

大ホール



参加者：181 名

聞き手：若松 進一 地域教育実践交流集会 実行委員長
語り部：松田 淳子 秋田県北秋田市教育委員会生涯学習課
佐藤 房枝 福島県社会教育委員
鍵山 直人 愛媛県松山市立堀江小学校 PTA 会長

若松：今回の大会では、若い人がたくさん集ってくださった。嬉しく思う。まずは、フロアから、昨日の感想を伺いたい。

大学生（尾道）：分散会では、地域の方の力が強いと感じた。大学生の力も必要と感じたので頑張りたい。また、自分の言葉で語れるようになりたいと思う。

双海町の青年：交流会が終わって、長い夜がとても楽しかった。双海では若松さんの少年のようなまなざしをいつもみている。楽しみにしていることが多い。

若松：インタビューダイアログとは、登壇者も参加者も平等な立場に立って話し合い、新しい考えや学びを分かち合うということ、話をフロアにふることもある。また、登壇者の話に意見等があれば、遠慮なく手を挙げてほしい。そのような感じで、この会を進める。

というわけで、会場みなさんに、「地域の教育力とは〇〇である」と自分で思うところを 1 分間で書いてもらいたい。スタート！

余談になるが、大洲市の白滝から来られている中村さんは身長が 2 メートル。わたしとは目の高さが違う。そうになると、見るものも考えることも違ってくる。自分という人間に問いかけた地域の教育力とはなにか、考えてほしい。

登壇の方々に、最初、3分で自己紹介、最後は新しい風とは何かを考えていく。

佐藤：福島、会津坂下町から来た。15,6年間公民館職員をしていた。今年4月からは家族でトルコキキョウ、カスミソウなど花の栽培をしている。息子も大学を卒業して、家に帰り、手伝ってくれている。今回は、社会教育協議会に属している立場から、福島の子どもたちの活動を紹介する。山の中で暮らしている子どもたちの地域活性化の話である。過疎化によって学校がなくなる、地域がなくなるという、問題をかかえていた、全校生徒12名の中学生が、お土産を開発して地域を元気にしていった過程を話したい。

若松：佐藤さんは、官から民へ変わって考え方が変わっていったということもあるかもしれない。そのような話も聞けると面白い。

松田：秋田県北秋田市からきた。少子高齢化の先進県でもある。高齢化率40パーセント。北秋田市の生涯学習課で人と人、人とモノ、人と町をつなぐという仕事をしている。市民の笑顔をつないでいきたいと思っている。

昨年度この会に参加して新居浜の関さんと知り合った。今回は、そのご縁で、新居浜南高等学校ユネスコ部の別子銅山ガイドと、北秋田市の山間の町阿仁合地区阿仁合小学校の阿仁鉦山観光ボランティアガイドが交流した話をする。阿仁合小学校は全校児童4531名、ボランティアには5、6年生15名が参加した。

鍵山：松山の端に位置する堀江小学校のPTA会長をしている。全校児童が600名ほど。今日は2つの話をする。一つは学社融合が地区の基本理念であること。地域と融合しながら活動をしている。もう一つはおやじの会。OBに教えていただきながら、活動を続けている。元気なおやじたちをどう活かすか考えている。

若松：特徴ある活動、活動をもたらす成果について

佐藤：中学生が地元のお土産を開発した。学校の総合の時間でひしを作ったことが始まり。もとは地区の伝統工芸品。ひしをかわいくして、地元の温泉旅館で売ってもらっている。PTAと学校ぐるみの事業である。生徒たちがデザイン企画をする。作ってくださるのは地域のお年寄り。子どもたちは、キッドをお年寄りの家まで渡しに行く。お茶をいただきながら、何か困ったことはないか等、話をして帰る。文化祭で生徒が作ったひしが好評で、注文依頼があった。しかし、中学生はそんなにたくさん作れないので、地域のお年寄りに頼んでいる。

若松：高齢者と子どもたちとの交流は

佐藤：生徒が地域の資源を探しに観音堂に行ったとき、ぶらさがっているひしを見て、これは何かと。「子どもの健やかな成長を願うもの」と知って、これを売り出してみようと考えた。しかし、作り方が分からない。当地区は過疎地域で一人暮らしの年寄りが多い。ひ

しを知っているのは70歳以上の方々である。生徒がお家を訪問して作り方を教わった。そのことが特産品を生むきっかけとなった。売り上げは、子どもの活動資金にしている。

若松：地域が知らず知らずのうちに、活性化した例と言ってもいいだろう。

松田：北秋田市では学校が15校、学校支援地域本部事業を行っている。市民全体で子どもたちを見守っている。阿仁合小学校の総合学習の時間、ふるさと教育をした。地域の子どもたちは大きくなると、北秋田市から外に出て帰ってこないことが多い。いつか故郷を思い出して、帰ってきてもらうことを願って企画している。

阿仁合地区は鉾山で栄えた町。文化が根付いている。「阿仁鉾山を学ぼう」という機会を設けた。子どもたちから、覚えたことを誰かに伝えたい、ガイドをしたいという要望があったので、地域おこしの一環として、「阿仁鉾山観光子どもガイド」をつくった。先生は73歳。観光ガイドとして年に5、6回、学びの成果を披露している。今年、新居浜南高等学校のユネスコ部のみなさんとの交流が実現した。

若松：関さん橋渡しはどのようにされたのか。

関：昨年、この場でそのつながりができた。交通費等経費も必要で難しいと思っていたが、市長部局との連携によってこの事業をすることができた。新居浜の高校生と遠く離れた北秋田市の小学生が新しいつながりができるとわくわくした。

若松：去年のこの会は感動の場面がたくさんあった。松田さん、地域を越えて、愛媛県とつながってどうか。

松田：鉾山のことなら何でも聞いてという人がいる。その方から、別子銅山とは昔からつながっていたと教えていただいた。ご縁だよとも。いいかたちの奇跡が7月23日に起こった。

鍵山：堀江のキーワードは学社融合。いっしょにしている事業は、泥んこ大会。田んぼを使って泥だらけになる。地域の人も参加する。ふれあい自由体験。地域の方に集まってもらって子どもと楽しく遊ぶ。遊びは昔の遊びに近い。地域の人に集まることで、お互いに顔が分かって、あいさつをかわせることができる。

若松：定着しているのは

鍵山：防犯上のこと。高齢者の方は時間に余裕があるので、下校時等、児童に声をかけてもらっている。また、まちづくりを核としているので、安心安全が広がっていく。

若松：3人の話のバックボーンとなるものの話を聞いた。今度は、こんなことを話したいというキーワードを聞かせていただきたい。

鍵山：子どもたちと地域のお年寄りで餅つき大会をする。お年寄りと遊びを通じて交流を図る。顔が分かることで、災害の折など、救命につながる。2つ目はいままでなかった人材、おやじの会を立ち上げた。女性の多いPTAの中で、男性の力は貴重な存在。

若松:地域の教育力が必要ということ。問題点はないか。

鍵山:高齢者の方は思いが強く、集合時間など、なかなか言うことを聞いてくれない。こちらもお願いをしているが、マイルールでしてしまう。若い者が理解していかなくてはいけない。遊びは、シンプルで単純なものを作って遊ぶ。保護者や高齢者がわいわい言いながら楽しくやっている。

若松:学社融合とのこと、学校との関係はうまくいっているか。

鍵山:協力をしていただいている。堀江小学校では、こちらの話をだいたいにおいてかなえてくれている。

若松:佐藤さん、子どもの学力、ふるさと愛、地域について話してほしい。

佐藤:学力っていったい何なんだろうと思う。教育委員会の重要課題だが、学力が高い子どもは結局のところ、地元を離れてしまって地域に戻ることはない。先ほどの西山中学校の生徒は、中学校卒業後、高校へ行くために家を出て下宿をする。子どもにとって学力が高いことは自己肯定感につながるが、地域にとっては過疎化の原因となる。身に着ける学力とは、テストの点ではなくってなんなんだろう。みんなで考えていかなくてはならないことだろうと思う。

若松:佐藤さんはどうでした。

佐藤:東京には出たものの、結婚で地元に戻りました。

若松:出世をするのがいい子どもと言われていたが、本当にそうか。そういったことを、誰が気づくのか。

佐藤:子どもが気づくこと。若者が少ない、地域に残らないというが、いきなりじゃないと思う。どんなふうに大人が子どもとかかわってきたかということ。小さいころから種まきをしないといけない。どのような体験をして、その体験が心にどのくらい占めているか、大人が押し付けるのは無理がある。

若松:地域の課題でもあり親の課題でもある。

佐藤:ふるさとの宝、自分の地元に関していろいろなことを知る。伝統文化や、資源、それも大事だが、ふるさとに愛着を感じるきっかけは人から。お年寄りのお宅に伺って、どんなふうにかわいがってもらったか、心に残れば愛着につながるのではないか。

私は、農業は素人なので、家で仕事をしていると人とかかわらない。子どもたちとのかかわりも遠のいている。自分から積極的に出て行って、うちのビニールハウスが公民館のようになったらいいなと思っている。

若松:暮らしの中に、社会教育を入れていく。自分の家業が子どもたちのふるさと教育になればいい。

松田:こういった講習会に出て、ヒントをもらいたい。

若松:社会教育に従事していた時代は、このような場に出ないと思っていたが、本当のところ

ろ、暮らしの中にある。子どもは道草をすることによって、未知の感触を得、一声かけたりふれあったり、その中で変わっていく。社会教育的発想が変わっていくとまた変わる。松田：阿仁合小学校の5・6年全員で、新居浜南高等学校ユネスコ部を迎えた。底力は地域。子どもは外に向かっている。忘れてほしくないふるさとのこと。学校の総合学習の中で子どもたちは自発的にかかわって5年目になる。最初は恥ずかしくて何も言えなかったのに、終わるころには立派な意見を言えるようになった。地域に響いている。地域に子どもたちの活動が浸透した。

阿仁合駅が80周年を迎え、地域でも盛り上げていこうということになり、子どもたちの鉱山のガイドが始まった。小学校6年の先生は、もじもじしていた子どもが、りっぱに観光ガイドとして成長している姿をみると、教師としてもやりがいがあると言われていた。

子どものメッセージ 抜粋

「夏、ボランティアガイドをした。知らない人に、名所とか一緒に回りながら解説をする。今まで、知らない人に話しかけることがなかったが、案内しているうちに自分から話しかけるようになってびっくりしている。お客さんが喜んでくれて、うれしかった。最初は、嫌だなと思っていたが、いろんな人と歩くうちにこれもいいなと思えるようになった。小学校卒業するので終わるが、機会があればまたしたい。新居浜のお兄さん、お姉さんの前でガイドができて嬉しい」。

年の差はあるが、とてもいい機会になった。

午後は、秋田大学海外鉱業研究会と新居浜南高等学校ユネスコ部と交流をした。小学生と大学生をつないでくれたのが、新居浜の高校生である。

若松：ぼくたちのやっていることがただしという気持ち、年上との交流とギャップが成長させてくれる。

鍵山：今まで、PTAメインで考えていたが、地域全体で考える、力強いと思った。

佐藤：秋田と過疎の話で共通点があった。鍵山さんのいう児童数600名は私たちにとっては大きな学校。おやじの会、集まってやっているのを見てみたいと思った。

若松：会場にえひめおやじの会の方が来てくれていると思う、どうか。

佐川：オレンジのティシャツ軍団でやってきた。地域と学校をつなげるパイプ役をしている。きがるに話せるおやじとして。できるものと思っている。

佐藤：昨日、もっと、詳しく聞きたいと思った。おやじが動くことにより、お母さん、地域も動くのだろうなと。学校の子どもたちはかわいい、このまま大きくなってほしいと思う。成長していく過程に少しでも多くの大人にかかわってもらいたい。子どもを中心としてつながっていくまちづくりがいいのだろうなと思った。

若松：テーマに沿っている。これから、フロアに振りたい。ご意見はないか

大畑：取り組みをお伺いした。地域への広がり次の展開を考えているのか。

鍵山：PTA の力だけでは難しいので、各種団体をお願いする。まちづくり協議会とかそのほかの団体などを利用して地域につなげていきたい。

市職員：いろいろな団体、企業等、魅力あるけれど、どうつなげればいいのか。地域と子どもとのつながりを共有する場を設定できれば。

佐藤：校長先生は、タイの日本人学校に赴任されていたことがあった。小さな中学校で、2人の教員は起業家。3年間で子どもたちに成果があった。見つめなおす機会。地域を出て生活することしか頭になかったが、残る選択肢もあることを知ってほしい。年寄り生きがいが必要。緊急時にはお年寄りの手助けができる。継続は、公民館とか環境協会等、展開していけばいいのではないかな。

中尾：どうすればより質の高い学びができるか、というのは日本も外国も同じ。外国の人は職業意識が高い。日本人は思いが先行している。少し感じた。

松田：学校もオープンになっていく。地域もオープンになればいい形ですすむ。地域の許容力をつけていく機会を拡充していきたい。人材育成。子どもの人数は減っても、元気な高齢者が多い。元気でいれば、地域のためにまだまだやれるぞと思ってくれる。学校を核としながら、まちづくりを推進する。行政としては、仕掛けが必要。賛同してくれる地域人を巻き込んでいく。

尾道大学生：地域の取り組みに期待するところは多いと思うが、大学生の立場として求められることを教えてほしい。

松田：とても嬉しい。秋田大学(秋田市)とは、車で90分ほど離れている。北秋田分校では、田植え、除草、稲刈り等、1年を通じてかかわってもらっている。小学生や中学生、地域の方との交流もある。スタッフは大学生が来るのを待ちわびている。宿泊をしたり、温泉に連れて行ってもらったり交流している場を見せてもらうのもいい。

佐藤：以前、公民館勤務していた。福島大学の学生、授業の時に来てもらってボランティアしてよとお願いした。以来、ゼミの学生は卒業すると次の人に引き継いでくれている。通学合宿のときは、公民館に寝泊まりして、ジャガイモ、花の種、収穫等してくれる。自分も体験するんだという気持ちがあるようだ。子どもは、大学生とふれあって、中学に上がるとボランティアをしますと言ってくれる。大学生のお兄さん、お姉さんがかっこよかったから、自分もしたいと。あこがれの対象となっている。

鍵山：地域のニーズ、自分たちでやることをプレゼンするとか、実際いろんなことをやってほしい。負担が重くなってやれなくなるのではなく、自分たちのやれる範囲で。あとは継続できるものかどうか。地域の要望に応えるというのは大切だが、本分をおいてまでもはどうかと思う。

若松：中高年が元気、なぜ元気か、金と暇と好奇心。大学生は金なし、暇なし、好奇心なし。人それぞれ地域の教育力が違う。最後に未来のメッセージをお願いする。

鍵山：保護者等を地域に出していきたい。PTAの活動を通して、地域活動へシフトしてほしい。

佐藤：どのような大人になっているのか。子どもがあこがれてくれる大人へ

松田：学びあうことが大切。世代を越えて学び合い地域への思いを伝える。

若松：昨日のアトラクション、継獅子に感動した。土台の大人が肩に子どもを乗せてさらに子どもを乗せる。つないでいくということはこのようなことを言うのだろう。本会も9回目となる。継続の力となっていると思う。最後に、中江藤樹の五事を正すを紹介する。

普段の生活やまわりの人々との交わりの中で、

「貌」なごやかな顔つきをし、

「言」思いやりのある言葉で話しかけ、

「視」澄んだ目で物事を見つめ、

「聴」耳を傾けて人話を聴き、

「思」まごころをこめて相手のことを思いやること、

これが人が生まれながらにして持っている正しい心を高める道であるということ。



特別企画



異業種交流会は意義があるか

廻し人：鈴木 眞理

指定討論者：三浦 清一郎

成田 みえ

佐藤 秀雄

関 福生

鈴木：実践を持ち寄っての会と理解する。それぞれの地域で会をする。あるいは、人様のお金を回している。どのように活性化しているか。課題を検討する。今回は、打ち合わせをしていない。どのような思いで活動をしているか、経緯について話をしてもらおう。

三浦：35年前に福岡で愛媛の実践交流集会のような会を始めた。組織的な評価の視点はない。自分ではなかなか納得がいかないことも、持ち寄ってお互いに評価し合うことによって元気が出る。実践家は孤立している。大学にも案内を出して大学の先生にも来ていただいたが、理論的に批判する。腹に据えかねたこともあり、学校の先生は呼ばないことにした。

鈴木：福岡県立の生涯学習センターで5月の第3の土、日に開催されている。意図を持った企画である。いくつかの事例発表がある。

さて、わたしはどういう人間かということ、好奇心の一点だけ。野次馬であることを周知していただきたい。

成田：西日本で話をするのは初めて。公民館に真剣に取り組んできた。平成19年、市町村合併、公民館はいらないと言われた。公民館主事はなにも言えなかった。2年ほど、110くらいの市町村に行き、なぜ公民館が必要でないのか聞いて回った。

私生活では、孫がいじめにあって苦しんでいたこともあって、地域が、公民館が頑張らないといけないと思った。

鈴木：活動について教えてほしい。

成田：若い人や公民館長、職員、教育長や首長も参加して知恵を出しながら研修をしている。首長は社会教育の勉強をしたことがないので、勉強会を催したところ、30名の参加があった。来年から、副首長も呼んでくれと言われている。

関：この会（愛媛の地域教育実践交流集会）を始めたのは、9年前。どうして始めたか。それまでは、子どものことにかかわっている人たちのつながりはあったが、みんなが集まって話をするような場がなかった。不安や悩み課題等、他の団体と話し合う場が必要ということで始めた。行政の手は借りなかったのも、何のしほりもなく自由に発言ができた。民間の開催であったので、参加者はすべて手弁当である。県内に呼びかけていたが、いつのまにか、輪がひろがり歴史ができた。人が集まることに意義があるのか、深めていきたい。

いろいろな思いを伝える場が必要だと改めて感じている。

昨年と今年度の2回、文科省の助成金をいただいて、県外からもたくさんのお客さんを招き、いろいろな実践を聞くことができた。

佐藤：私自身の簡単なプロフィールを紹介する。国立青少年交流の家で採用された。大学生で社会教育を知り、以来、生涯学習・社会教育の場で仕事をさせていただいている。現在は文科省社会教育課に席を置き、その事業の関係でここにいる。

鈴木：9回のうち2回は文科省のお金でやったと言われたが、たかだか、2回。このような集会にお金を出すようになった経緯を教えてください。

佐藤：それまで、公民館GPという事業があった。公民館でいいことをやっているところを紹介していたが、地域に任せてしまいなさいと切られてしまった。それで、公民館の成果を考える会として、様々な立場の人が集まり、気づくようなそのような会にお金を出してくださいと。この委託事業についてざっくりばらんに話した。

鈴木：国も、様々な問題をかかえている。このような会にお金を出した方がいいと考えたということだろうか。

福岡も公式な研究組織として文科のお金を貰ってやっている。ということは、愛媛の例とは少し違うかもしれない。それぞれがどんな工夫をして進めてきているのか。どのあたりに課題があるのか、職員の悩みや思いにつなげる。その思いが、自分一人のものではない、どのように共有するか工夫する。他の地域の事例、課題、自分たちの事例をどう深めていくか。行政はどのようにしていくのか、話を聞くことにする。

三浦：日本生涯学会に参加したことがある。やったことがないのに、理屈ばかり。「おまえがやってみろ」というのが印象だった。そのこともあって、福岡では、「実践なくして発言権なし」で実践家だけを集めた。金を貰うと出した人が口を出すだろうと思い、自分たちで開催することにした。交流会で競り市をしているが、一銭もない私たちに地域が物を持ってきてくれてそれを競りで落として資金の一部にさせていただいている。その伝統が持続力をもたらした。同じようにがんがばっている同志に絆が生まれ、くじけずやっていった。毎年、5月の第三土日と日時を合わせることで、計画を立てることができた。同志に会うことがエネルギーの源になっている。

関：職員というかたちではなく、むしろ、自分たちの活動の一環として、地域の中で活動している人にスポットをあてた。同じような立ち位置で活動している人ばかりだと、不満等、傷をなめ合うようなかたちになりやすい。他の立ち位置の人がいることによって、違う道が見えてくる。

立ち位置と関係性としては、人がつながることによって、1の活動が2~3へとなる。この会で知り合った「特定NPO法人えひめいぬ・ねこの会」と新居浜がネットワークでつながった。先ほどの『めざましトーク』での秋田の鉾山もそう。同じ釜の飯を食って、語り合うことで次のことを生み出す。また、自分たちのことを客観視できる。北海道と西日本では考え方が違うということを知る。カンファレンス事業を受けたことによって、つなが

りを確保できたと思う。交通費など負担がかかることもあるが、この事業を認めてくれるのなら、全国とつながることができる。呼び水にこのお金を使う。自分の身の丈に合わないことをするとしんどい。愛媛の地域教育実践交流集会も10年を一区切りとして、今後、どのように展開していくか探っていく。壁にぶちあったら、違う方向で考えていきたい。

鈴木：地域の実践家とのかかわりは

成田：わたしだけが民間人だったが、行政が私の考えに耳を傾けてくれた。社会教育プロジェクトで、関さんが北海道に目を向けてくださり「他県の考えも聞いて、北海道はどうあるべきか考えましょう」と言ってくれた。

個々の公民館へ町の特産をつくろうと呼びかけた。ある町では、メープルシロップを作り文科省の補助金を貰い、自分たちの村のために使った。いろいろ言われたが、そのことが北海道公民館協会の土台になっている。自分のところで事業をするときは、行政マンと地域の人意見を聞いて組み立てていく。無駄遣いはしたくないので、研究だけのために先生は呼べない。現地に行って足を運んでくれる人しか使わない。海外のコミュニティセンターで、日本には公民館があって、そこで社会教育をしているよねと言われた。行政と民間がタックを組んで事業をすると必ずうまくいく。

佐藤：いろんな方々が、参画することによって、防災や健康福祉においてもつながりができる。社会教育がつなげている。地域の課題解決は、社会教育という場を借りて、異業種が交流することにより、いろいろな気づきがある。文科省に持ち帰り、情報交換をして、行政にも生かしていきたい。コンファレンス事業で、どんな気づき、課題があったか、行動に移していく。国民の税金を出しているから、成果があったかどうか、きちんとかえしていかなくてはいけない。集会の持ち方においても、目的は何か、逆算して考えない。

鈴木：行政の役割、行政との連携、行政との連携はそんなに簡単なものではないと思っていた。本質的なもの、ルールが違う。行政とどのような関係を持つかという話を聞きたい。

三浦：どの部署とつながるかによって違う。福岡でも、最初の2年間は大学で開催して、別の所に泊まってだったが、行政との連携によって生涯学習センターを借りることができた。他県の人のためになぜ、貸さなければならないかともいわれたが。

5,6年経って、生活を支えているのは異業種だと知った。にもかかわらず、社会教育は手も足も出ない。それで、「生活にかかわる人に来てもらおう」とした。年寄りや子どもにとっても、生活をよりよいものにするためにかかわってくれている人たち、例えば、おやじの会の人たちは、生活を支えながら、子どもにかかわってくれている。

関：今回も愛媛の大会に参加してくれている尾道の大学生は、自分の道を選択する前の人たち。いろいろな人とつながって、影響していくのだろうと思う。ここでつながった人が将来活躍していつってくれる。大学生の意見等聞いてみたい。

鈴木：当然、行政とは敵対するものではない。島根の方では、「自分のところでもやってみよう」と実践されている人がいる、大畑さんの事例を公表してほしい。

大畑：益田市の教育委員会で働いている。15年前に福岡で発表の機会があった。自分たちのやっていることが評価されたと思った。また、他でもやっているという安心感。もっとやるぞと思った。「隣の芝生は青い」、遠くの人に来ていただいて、評価してもらおう。地元の人メンタリティにとって、とってもいい。地方都市にメリット、他の人が来てもらうことによって元気になれる。

鈴木：徳島大学の馬場さんが来られている。全国の交流集会、これからは必要になるのではないかとおもうが。

馬場：地域で頑張っている人をどう全国で、抜粋していくか。国の役割で発信していかななくてはいけない。東日本を含め、このような会があちこちで出てくればいい。東日本ラインは新潟で開催したのが最後の仕事だった。個人的には、国のお金をつかわないほうがいい。行政は口をださない、民間でやった方がいいと思っている。今、社会教育は、行政ががんばっているところよりも、それ以外の方が目立っている。お互いが持ち寄ることによってステップアップにもつながる。公民館 GP なども、こんなにがんばっているところがあると、国が引っ張り上げて、抽出すると、公民館事業とはぜんぜん違う方向になることもある。

す：茨木の方で、県の行政が中心になっているところもある。このような集會を国社研で開いたこともある。成田さんのところのように、行政の職員が中心、異業種だけれど、OB とつながっているところもある。国の機関と一緒にするのは大それたこと。福岡から、大畑さんのような人材が現れたみたいな、ネットワークができればいい。実行委員会は当初の目標を達成されたのか。創業者がやろうとしたことがいいのかどうか、変わっていくことをどのように評価しているのか。

三浦：会の提案をした。2代目はこの会と一緒に来ている。金を使うにはきちんとした報告が必要。結成10年で1冊の本を出した。それぞれの分野が異なっても、未来は何を必要としているかが大切。特別企画を考えると、この10年、未来に必要なものを出してきた。違ってきているがそうでないと進化しない。首長を集めたことがあったが、研修生として集めたことはない。成田さんのされた研修はお見事である。

鈴木：公民館を他に広げていくと行く発想について、きっかけ、基盤について教えてほしい。

成田：研修してくださるのがどのような先生にもよる。社教主事は、首長と話したことがない。首長にすぐ話しにいけるタイプがいい。3分の1が社教経験者。箱ものでなくてもできる。しかし、社教主事はそのようなことができない。いろんなことがあったはずなのにできない。なぜできないかを首長に気づかせて、社教主事に問いかけてほしいと討議の折、先生にお願いした。社教主事が必要なのに減っている。研修の中で会長がかわった。社教主事の必要性が分かってくさったようだった。

鈴木：まともな社会教育主事がいるかどうか。きちんと自分のしたことが分かっている人が少なくなっている。分かっている課長補佐がいない。異業種交流会はいいと思うが、

私たちの発想はそのところにある。きちんと考えながら、必要かどうか、考える必要がある。

関さん、変えようと思うときはどんな時か。

関：ここでは、地域教育という言葉。地域とかかわっていくことで、より良い力を育んでいく、学んで、地域に戻していく力がある。行政そのものが、いかに幸せな人生をおくることができるか、住民、市民も当事者として、かかわっていく力がほしい。実践重視は間違いないので、整理していく作業がある。整理していく作業は、学びのコミュニティ研究所というシンクタンクがあるので、それをもとに次のステージへコマを進めたい。

鈴木：この2日だけで終わりではない。地域教育を民間レベルで考えていくということか。行政レベルとしてかかわっているが、行政らしくない形で。

この集会は、どうなっていくか、こうあってほしい、意見があれば聞きたい。

尾道の大学生：この地域教育実践交流集会をなくしてほしくない。初めて参加させていただいたが、いろんな社会人と交流できていい刺激となった。おやじの会の方々とも仲良くさせてもらった。自分は周りに流されやすいので尾道を出るとき、四国へ行って周りに流されるなど周囲に言われたが、こちらへ来てそういうことではないと思った。

双海町の人：やっていってほしいこと。ここに参加している人は、経験値が上がっている。地域に落とし込むときに、解離することがあると思うが、視線をどの位置に合わせるか、議論を深めていってほしい。

鈴木：まずは、そう思うあなたがしていってほしい。このような集会在だんだんひろがっていけばいい。一番面白いのが、ずっとかかわってきている人、関係者をきちんと見ていないといけない。作っていく面白さやどう継承できるかできないのか、できないのなら、辞めてしまえばいいと思う。そうすると、また、新しい人がつくる。

三浦：新しいものを付け加えていかないと、会は崩れる。どうすればいいか。

古市：福岡の森本、三浦、続いて3代目です。10回目から出てきたのは、「町おこし」。社会教育行政関係以外の人たち、NPO とかの対象者を見ていると、いろんな人がいる。地区でも県域を越えたところのシステムができればいい。民間も一緒になって取り組む。35回目に向けていろいろ考えている。

① 法律は、社会教育の定義。厚生労働省管轄で誰も手を出せない。学童に教育プログラムをいれる。引きこもりは70万、155万が予備軍という。社会教育の新しい方法で、引っ張り出す必要がある。

② 会員も増えたので、変えていかななくてはいけないのは、ワンランクアップした考え。社教主事の研修等、元気になっていただく。

② 行政はおじゃまにならないように役に立ってもらう。事例を持ち寄る中で、表面的なところ等、このようなところが困っているとか、アドバイス、掘り下げていけば、持って帰るお土産ができるのではないか。

③ 意義があるかどうか、参加する人それぞれ、つながることによって、設けるような会。

自分から積極的にかかわっていく仕掛け。企画段階で、わたしやってみたいというひとを募ってやる。それができれば、10年以降脱皮をしながらやっていくことができる。

鈴木：三浦先生締めを

三浦：ビジネスができないときは、アウトソーシング。その発想は、社会教育にも必要。影は、NPO等、行政はそこにお金を出せばいい。